

第 I 章 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

総社平野は東を足守川、西を高梁川によって画され、北は吉備高原南端の山地に、南は都窪丘陵などの低丘陵地帯群に挟まれた東西約 8 km、南北約 5 km の沖積平野である。

高梁川は影谷川や日羽谷川、そして新本川などと合流して市域の北西から南東方向に貫流し、市域東辺には足守川が砂川や血吸川などの支流と、かつて平野を西から東へ流走していた古高梁川を合して「吉備の穴海」へと注いでいたのである。こうした河川の浸食、運搬、堆積作用を繰り返し造出された沖積平野には自然堤防などの微高地や後背湿地が形成され、丘陵裾部一帯には小扇状地や河岸段丘が認められる。

一方、総社平野の北側に広がる吉備高原は、標高 400 m ～ 600 m 級の小起伏浸食面であり、吉備高原の南端に鬼ノ城が位置している。鬼城山一帯の地質は古生代白亜紀の広島型花崗岩に属する細粒～中粒花崗岩で、地表面付近は強風化の影響によりマサ化している。

一般的にはこのマサ土は風化や浸食作用を受けやすい地質構成であり、山地から流出した土砂により随所で小規模な扇状地が形成され、平野部の微高地と共に人々が居住する適地となっている。

しかし、土質の性格にも由来して土砂流出の被害は、鬼城山一帯の山地においても深刻なものがあつたと伝えられ、明治時代以来、大規模な砂防工事が施行されることになった。山地のいたる所に砂防石垣や土段を無数に構築し、植林を含めた治山事業の成果が今日ある自然景観の一部を形作っている。

(2) 歴史的環境

総社平野における旧石器時代の遺跡は、高梁川左岸の低丘陵に宝福寺裏山遺跡や浅尾遺跡、あるいは長良山より南側の微高地上に位置する窪木薬師遺跡からナイフ形石器などがわずかに捉えられる程度である。

縄文時代早期には総社平野のほぼ中央に位置する真壁遺跡や長良山遺跡、そして平野南端の大正池南岸遺跡などが知られているものの断片的な資料に限られている。縄文時代前期の遺跡は、高梁川左岸の段丘上に位置する日羽ケンギョウ田遺跡が著名である。

総社平野の沖積化に伴い本格的に人々の進出が始まったのは、今のところ縄文時代後期に求められる。後期の遺跡は先述の日羽ケンギョウ田遺跡や、真壁遺跡があり、南溝手遺跡（岡山県立大学）では後期後葉の粘痕土器が出土した。また、プラントオパール分析によって後期中葉の土器の胎土からイネなどのプラントオパールが確認されており、打製石鍬や石包丁状石器などが出土している事実は、⁽¹⁾ 農耕の可能性を示唆している。

弥生時代前期～中期にかけて遺跡は次第に増加し南溝手遺跡、窪木遺跡、真壁遺跡などで竪穴住居が散在して確認され、集落は微高地上に点在するものと考えられている。また南溝手遺跡では「松菊里型住居」や玉作りを行っていたことも判明している。

弥生時代後期になると遺跡の拡大と共に、平野部の微高地上あるいは丘陵裾部に点々と集落が確認



- | | | |
|----------------|-------------|------------|
| 1. 鬼ノ城 | 8. 宿寺山古墳 | 15. 南溝手遺跡 |
| 2. 千引かなくろ谷製鉄遺跡 | 9. こうもり塚古墳 | 16. 栢寺廃寺 |
| 3. 随庵古墳 | 10. 江崎古墳 | 17. 三須河原遺跡 |
| 4. 津寺遺跡 | 11. 緑山古墳群 | 18. 展望台古墳 |
| 5. 造山古墳 | 12. 備中国分僧寺跡 | 19. 三笠山古墳 |
| 6. 作山古墳 | 13. 備中国分尼寺跡 | 20. 小造山古墳 |
| 7. 角力取山古墳 | 14. 窪木薬師遺跡 | 21. 水城状遺構 |

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/40000)

されており、周辺の低丘陵上にも中期から後期の小集落がいくつも確認されるなど集落規模の拡大が顕著である。その一方、宮山墳墓群をはじめとした集団墓の造営が丘陵上に認められ、それらから卓越した首長墓として弥生墳丘墓が出現し、高梁川右岸域では立坂弥生墳丘墓や伊与部山弥生墳丘墓と共に、特殊器台や特殊壺に表徴される葬送儀礼用の土器が新たな展開をみせる。

古墳時代前期になると初源期の古墳とされる宮山古墳が三輪山丘陵に造られ、天望台古墳と三笠山古墳が継続的に築造され首長系譜が追える一方で、総社平野の周辺丘陵部には井山古墳、秦大塚古墳、秦茶臼山古墳など30～50m級の前方後円墳が点在している。弥生時代後期末から古墳時代前期前半の集落遺跡は、岡山市津寺遺跡⁽²⁾や矢部遺跡群⁽³⁾のように在地の土器と共伴して畿内系、山陰系、讃岐系などの他地域産の土器や、その影響を受けた土器も出土し、遠近の地域間交流が活発化しており、市内においても単発的ではあるが窪木遺跡から河内型庄内甕や、窪木薬師遺跡では東海系の台付き甕など、遠隔地交流をしめす遺物が出土している⁽⁴⁾。

古墳時代中期には岡山市新庄下に、墳長360mという全国的にも際だった造山古墳が築造され、三須丘陵の南端には全国第9位の規模を誇る作山古墳、宿には宿寺山古墳や角力取山古墳などが存在する⁽⁵⁾。岡山市新庄地区から総社市三須地区にかけての低丘陵には小造山古墳、夫婦塚古墳、銭瓶塚古墳、折敷山古墳をはじめとする数多くの中小の古墳が築造され、近年久米の御灰山山頂には墳長約55mの前方後円墳である久米大池1号墳が発見された⁽⁶⁾。

また、当概期にはTK73型式に先行する奥ヶ谷窯跡や、窪木薬師遺跡⁽⁷⁾から出土した朝鮮系遺物と共に鉄器製作と関連した集落の様相が判明しており、さらに北方3kmの丘陵上には鍛冶具一式を副葬した随庵古墳などの存在を勘案すると、鉄生産や須恵器製作などの先端技術がいち早く導入され、展開している様子が認められる。

古墳時代後期は、横穴式石室を主体部とした群集墳が爆発的に増加し、前方後円墳は全長約100mのこうもり塚古墳に続き、江崎古墳の築造をもって終焉を迎えると考えられている。このこうもり塚古墳や江崎古墳には岡山県井原市産の浪形石製家形石棺が使用されており、秦に所在する金子石塔塚古墳にも同種の家形石棺が使用されている。集落遺跡ではカマドを造りつけた住居が増加し真壁遺跡や、三須畠田遺跡、窪木薬師遺跡など数多くの遺跡が明らかになりつつある。

538年の仏教公伝を経て飛鳥時代には、吉備の地にも数々の古代寺院が建立される。秦には7世紀前半に創建された秦原廃寺が所在し、北へわずか150m離れた天神社境内から秦原廃寺へ供給した瓦窯が新たに発見された⁽⁸⁾。

また、山手の末ノ奥窯は飛鳥の豊浦寺に供給した奥山久米寺式の軒丸瓦のほか、豊浦寺関連遺跡である平吉遺跡の鬼板や、古宮土壇（小墾田宮推定地）の文様埴も生産しており、蘇我氏との関係がつとに指摘されている⁽⁹⁾。

7世紀中葉以降は国府推定地の東に位置する栢寺廃寺と、律令制下の窪屋郡内に三須廃寺が存在する。栢寺廃寺の軒丸瓦2類は備後の寺町廃寺の水切り瓦と同範関係にあり、栢寺廃寺から寺町廃寺へと範の移動が考えられている。

寺町廃寺は『日本霊異記』に記載されている三谷寺に比定されており、説話によれば三谷郡の大領の先祖が眷属を率い百済の役に出陣する際、無事帰還することを願い寺院建立の誓願を立てた話が残されている。大和朝廷が660年の百済滅亡後に再興を目指し、朝鮮半島に軍事介入した百済の役（661～663年）には、西日本を中心に軍兵が編成され、瀬戸内海沿岸の地域や九州地方から出兵した豪族

や帰還した兵士の話が断片的に残されている。吉備の地にも倉敷市真備町上二万、下二万の地域がかつて「二萬郷」⁽¹⁰⁾と呼ばれたらしく、百濟救援軍の募兵を行った由来を持つ地名説話として『備中国風土記』逸文に見える。

663年、白村江の戦いで倭軍は大敗を喫し、倭は対外防衛策として664年に対馬・壹岐・筑紫に防人と烽を置き、665年以降に大野城や基肄城などの朝鮮式山城を築城する。朝廷は対外的な軍事的緊張関係を背景に、律令に基づく中央集権化を目指し甲子の宣をはじめとする諸改革を大きく進展させていくが、当地においても広域行政官である「吉備大宰」が設置され、壬申の乱から大宝律令の施行にいたる約30年間に『記紀』に見える。いわゆる大宰・総領制は、朝廷が認めた重要な地域に施行されたと言われ、吉備以外にも筑紫、伊予、周芳に設置された⁽¹¹⁾。

総社平野を眼下に収める鬼城山には、古代山城の鬼ノ城が築城され、出土遺物や他の古代山城の比較検討から7世紀後半から8世紀初めには機能していたことが判明しているが、築城時期については諸説あり定説をみていない⁽¹²⁾。

鬼ノ城の南山麓には、奥坂から東阿曾にかけて延びる丘陵上に奥坂遺跡群が所在している。6世紀後半に遡る千引カナクロ谷製鉄遺跡をはじめ、6遺跡で20基の製鉄炉が見つかり、6世紀後半から8世紀前半まで、ほぼ連綿と製鉄の操業が続けられた。

新本川右岸の久代でも沖田奥、藤原、大ノ奥、古池奥、板井砂奥などの製鉄遺跡から62基の箱形製鉄炉と横口式製炭窯16基が検出され、操業年代は7世紀代に中心がある。山田川右岸の砂子遺跡においては、鉄鉱石加工から鍛冶工程までの一環した工人集落遺跡が調査され、この一帯があたかも製鉄コンビナートの様相を呈している⁽¹³⁾。

この高梁川右岸域では7世紀代の特筆すべき古墳として久代の長砂2号墳が挙げられ、県内唯一の横口式石槨を主体部とする方墳として著名であり、石材に竜山石を用いている。

8世紀には総社平野に備中国府が造営され、『倭名類聚抄』には賀夜郡に所在したことが記されている。金井戸地区には「国府」等の地名が多く残り、近年御所遺跡では国府関連の遺跡が発見され注目を集めているところである⁽¹⁴⁾。市内の官衙遺跡は、「郡殿」銘の墨書須恵器が出土した三須河原遺跡^{みすこうら}が窪屋郡衙の一部と推定され、三須河原遺跡より西へ500m離れた三須中所遺跡^{みすなかんじょ}では、8世紀後半の遺物が大量に出土し、「賀夜」と記された墨書土師器の存在などから当該期の窪屋郡衙の可能性が指摘されている⁽¹⁵⁾。新本川流域では、大規模な掘立柱建物が発見された横寺遺跡が所在する。横寺遺跡は7世紀末葉の官衙遺跡と考えられ、下道評衙の可能性が想定されている。

総社平野の南端には都から大宰府までを繋ぐ山陽道が東西に走り、合併に伴う市域の拡大により津峴駅から河辺駅までの駅路が大きく含まれることになった。

天平十三年（741）、聖武天皇の勅願により全国的に国分寺が建立されることになり、備中国では鎮護国家を祈祷する仏教施設として、窪屋郡に国分僧寺と尼寺が造営された。仏教文化の普及と共に、市内では「矢田部首人足 宝亀七年定」銘の刻字埴が市指定重要文化財に登録されており、下道郡を中心に道教に由来する買地券の風習も知られている。

平安時代の市域には、現在の市名の由来になった備中国内の祭神を一ヶ所に勧請して祭る総社（惣社）が置かれ、当地域が国府と共に備中の祭政の中心であったと見られる。また、吉備高原の南端には山岳寺院の新山寺^{にいやま}が所在し、『成尋阿闍梨母集』によれば成尋が延久三年（1071）に新山寺に入山して、渡宋のための修行に入るなど都にも聞こえた大寺であった。建久四年（1193）に俊乗坊重源が

備前国を造東大寺料国として管轄した際、新山寺にも関与した事績がうかがえ、現在、伝浄土堂にはおびただしい瓦が散布し、近傍に安置されている「鬼ノ釜」は、衆生浴施のため設置された湯屋の釜と推定されている。また、中心伽藍から周辺の山頂部には建物跡や瓦の散布が認められ、鬼ノ城においても13世紀～14世紀代の遺物が散布しており、山間部の広範囲に宗教施設や山林修行の跡地が展開していると見られる。さらに、永享元年（1429）「備中国惣社宮御造営帳之事」などの史料によれば、総社宮の造営や遷宮の事業に対しては、周辺寺院への負担が要求され新山寺、朝原寺、広谷寺、福山寺などの寺名が記載され、文献資料によりある程度、寺の消長と活動がうかがえる。

鎌倉幕府滅亡後の建武の新政から、室町幕府成立時までの南北朝の動乱期には、当地域も戦乱の渦中にみまわれ、山手では新田方の大江田氏経と、足利直義との間で福山合戦が行われた。兵火は備中国分寺を含む周辺の寺院におよび、国分寺もこの時に焼亡したと伝えられている。

応仁の乱から戦国時代の備中では、細川氏の守護代であった庄氏、石川氏に次いで、三村氏が国人を結集して勢力を伸ばしたが、この地域には在地の大きな勢力はなく、国人層が分立し他国の有力な勢力の消長によって左右されていた。

天正5年（1577）に織田信長は、中国征伐のため羽柴秀吉を派遣し、著名な備中高松城の水攻めが敢行された。黒尾の経山に築かれた経山城は、毛利氏の東辺の押さえとして重要な位置を占め、現地には郭や土塁、虎口などが良好に残存している。また、総社遺跡では清水宗治の部将である国府氏に比定される居館跡も発見され話題をよんだ。⁽¹⁶⁾ 織田信長が急死すると羽柴秀吉は毛利輝元との和議を整え、その条件に基づき中国国分けが実施され、総社平野は高梁川を境に西が毛利氏、東は宇喜多氏の支配するところとなった。

関ヶ原合戦後（1600年）、元和元年（1615年）に豊臣氏が滅亡し、徳川幕府の支配が不動のものになるにしたがい、新たな大名領が設定されていく。しかし、多くの大名・旗本領に分割された市域は、相給地もあるなど複雑に入り組み、本拠をもったのは浅尾藩蒔田氏と旗本蒔田氏である。

幕末の文久3年（1863）に旗本井手蒔田氏は1万石に高直しを許され、大名に列すると市内門田の浅尾に陣屋を構築し、さらに陣屋町の形成も考えていたようである。しかし、慶応2年（1866）に長州第2奇兵隊脱走兵による「倉敷浅尾騒動」がおこり、陣屋の焼き討ちの後、十分な復興もなされないうまま明治を迎えることになった。

註

- (1) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年
- (2) 「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104 岡山県教育委員会 1996年
- (3) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 岡山県教育委員会 1995年
- (4) 「窪木遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 岡山県教育委員会 1998年
- (5) 『造山第2号古墳』岡山市教育委員会 2000年
- (6) 「久米大池1号墳（御灰山古墳）測量調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』13 総社市教育委員会 2004年
- (7) 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 岡山県教育委員会 1993年
- (8) 「秦（秦原）廃寺確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』6 総社市教育委員会 1996年
- (9) 『蓮華百相一瓦からみた初期寺院の成立と展開一』檀原考古学研究所附属博物館 1999年
- (10) 浄御原令制下においては「吉備中国下道評二万マ里」と記された木簡が知られている。
『岡山県史』第三卷古代Ⅱ 岡山県 平成2年 P201
- (11) 『岡山県史』第三卷古代Ⅱ 岡山県 平成2年
- (12) 「古代山城 鬼ノ城」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』18 総社市教育委員会 2005年

- (13)「山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(6)」『総社市埋蔵文化財調査年報』11 総社市教育委員会 2001年
(14)「三須河原遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 総社市教育委員会 2003年
(15)「平成14・15年度 東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』14 総社市教育委員会 2005年

参考文献

- 『総社市史』通史編 総社市 平成10年
『総社市史』考古資料編 総社市 昭和62年
『山手村史』本編 山手村 平成16年
『山手村史』史料編 山手村 平成15年
『岡山県の歴史』山川出版社 2000年
『古代を考える吉備』吉川弘文館 2005年

第Ⅱ章 平成6～7年度(1994～1995) 東門における発掘調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

鬼ノ城の南東部に位置する東門(旧称第1城門)は標高約290m、山麓の阿弥陀原集落との比高差は約230mであり、当所からは製鉄遺跡として著名な、奥坂遺跡群が立地する低丘陵地帯を一望し、西阿曾字池の下に所在する土塁、すなわち水城状遺構を間近に見通す好所でもある。昭和53年の鬼ノ城学術調査団による城壁線の踏査と第2水門のトレンチ調査以来、17年ぶりに史跡整備と関連して発掘調査の先鞭をつけることになった。

昭和55年刊行の報告書『鬼ノ城』には、城壁線を中心とした踏査に基づき詳細な観察事項が記述されている。わけても城壁が直線構造であることを指摘し、直線区間を一単位として「塁状区間」を設定した事が重要で、現在第118塁状区間までが周知されている。また、第1水門～第5水門が新たに認知され、城門の候補地として第1城門・第2城門・第3城門が推定された。

今回の調査対象地となる東門は、第51塁状区間に城門を比定しており、その認定には「内側の築地状土塁が急角度をもって外方へ折れ、次の築地状土塁との間に約7mの開口部をつくりだしている事実にもとづく。」とし、しかも開口部には城内へ石面を揃えた2段積みの石垣を確認している。踏査の段階で城壁の切れ目に着目し、その空間を城門として捉えた視点は、まさに調査者の慧眼と言わなければならない。踏査段階のこの優れた観察は、後の発掘調査で明らかとなる西門、南門、北門発見の契機へと受け継がれるのである。

多大な成果を取めた学術調査を経て、昭和58年には城内の中央部において礎石建物が発見された。文献に名を留めない古代山城(神籠石)は城内建物の不明な城が多いのであるが、鬼ノ城では城壁線と建物群が一体不可分に備わった古代山城として、昭和61年3月25日文部省告示第38号を受け、国指定史跡に指定された。

その後、平成元・2年で指定地全域の公有化が行われると共に、遺跡の整備公開の必要性が高まり、平成5年3月22日には「鬼城山整備委員会」が設置され、保存並びに整備に係わる計画の策定について指導・助言を受けることになった。また、整備に必要な基礎資料を得るためには発掘調査により遺